ゴードン・ラッツラフ教授を送る

立命館大学政策科学部長　本　田　　豊

ラッツラフ教授の学歴は大変ユニークで、1963年母国アメリカの大学入学を皮切りに、アメリカのみならず、スペイン・フランスも含めて3つの大学に入学し卒業されました。その後アメリカのカンザス大学大学院修士課程言語研究科に入学、1972年に同修士課程を修了されました。1965年から1973年の期間に、アメリカ・ドイツ・ポーランド・フランスなどで英語教育の教鞭をとり、1974年に来日、大阪大学言語文化部専任講師として、日本での英語教育に従事されました。その後、アメリカにもどり、1978年カンザス大学大学院博士課程外国語教育学研究科に入学、英語教育と異文化間コミュニケーションの研究を続け、同大学院から応用言語学の博士号を取得されました。

ラッツラフ教授は、母国にとどまらず多くの国で研究･教育を実践経験する中で、フランス語･ドイツ語・日本語・朝鮮語など9カ国語を学び、諸外国の文献研究などに意欲的に取り組むことを通じて、母語と外国語の関係や言語と文化の関係を重視する必要性を問題意識として深められたことが、ラッツラフ教授の多彩な教育研究活動の背景にあると思われます。

ラッツラフ教授は、言語を歴史的に考察する比較言語学や社会とのかかわりで言語を研究する社会言語学を分析視角としながら、言語の獲得・習得、言語教育などを研究対象とする応用言語学の分野において多数の研究業績を積み重ねてこられました。

一例をあげると、英語・フランス語・日本語の3カ国を自由に使いこなす自分の子供の言語習得形成と社会の関わりをち密に分析するとう大変ユニークな事例分析を通じて、母語以外の外国語の言語習得がどのようなプロセスで形成されるかといことについて理論的考察を行った研究成果を公表されています。

また、社会言語学の理論を中核とし、長年にわたる教育実践に裏付けられた英語運用能力の指導法に関連する研究業績も多数にのぼります。そこでは、表現の言語的正確さより発話の社会的適切さの重要性を力説するとともに、コミュニケーションの手段として使える英語運用能力の養成については、出来る限り現実に近い場面や状況を設定し、その状況の中で最も相応しい表現方法を考えさせて実際に対話を行わせるという指導方法が有効であることなどが明らかにされています。

ラッツラフ教授は、1996 年 4 月から現在に至るまで、学生の目線にたちながら、政策科学部における英語教育に大変熱心に携わっていただきました。ラッツラフ教授の教育方法は、自らの研究成果を実践にうつすという教育と研究が密接にむすびついているところにひとつの特徴があります。ただ単に英語を教えるというのではなく、学習の動機づけの重視、教材や実話を通じた人間教育、自由な雰囲気で英語を学べる環境作り、日本と欧米諸国の文化の違いなど異文化理解の態度養成など、学生ができるだけ広い視野と意欲をもちながら英語運用能力を取得することを目標に一貫した努力をされてきました。教育と研究を通じたラッツラフ教授の政策科学部への多大な貢献に心から敬意を表したいと思います。ラッツラフ教授は、2010 年度を持って定年退職されますが、2011 年度以降も、特任教授として言語教育情報研究科で院生の指導にあたられることになっており、今後とも引き続き立命館大学の言語教育の発展のためご協力のほどよろしくお願いしたいと思います。長い間本当にありがとうございました。